

第250回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
—「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（3）

第1章 マラトとピッピの笛 —出生から大学卒業まで（1894—1920）

2 上京—第一高等学校・東京帝国大学時代

福本和夫が学生時代を回顧する記述からは生活ぶりが伝わってこない。実家が貧しい学生の中には郷土出身の篤志家の書生として上級学校に通う者もいた。小地主兼自作農である福本家の経済力がどの程度のレベルだったかわからないが、7人きょうだいが上級学校へ進学しており、少なくとも苦学生ではなかったことは確かである。

筆者は田井集落から30キロほど山陰道を東へ進んだ旧宿場町に生まれ、学生時代などを除いて半世紀以上住んでいる。旧制中学校に入学するのは1学年2クラスの小学校から毎年1、2人であり、千人弱の集落で帝大へ進学したのは戦前を通じてわずか1人しかいなかったと聞いたことがある。田舎から帝大に進むことは、現在では想像もつかないくらいきわめて稀であったのだろう。

福本は第1次世界大戦（1914年7月28日—1918年11月11日）が勃発した年の9月に第一高等学校に入学して第1部英法科で学ぶ。なぜ英法科を選んだのか、その理由は書いていない。

東京帝国大学（1877年創立、1897年の京都帝国大学創設までの名称は「帝国大学」）予備門を引き継いで1886年に創設された第一高等中学校は1894年に第一高等学校に改称される。修学期間は3年で、第1部（法学、政治学、文学）、第2部（工学、理学、農学、薬学）、第3部（医学）の課程があった。さらに第1部は第1外国語によって英法科と独法科に分かれていた。ちなみに、1918年からは3部制ではなく理科と文科に大別され、第1外国語にフランス語が加わって文科甲類（英語）、文科乙類（ドイツ語）、文科丙類（フランス語）、理科甲類（英語）、理科乙類（ドイツ語）、理科丙類（フランス語）と6類に細分化された。

福本の一高時代の思い出を読んでいると不思議に感じることもある。第1次世界大戦のみならず世の中の動きについてほとんど何も語っていないのである。

福本は、「日露戦争を知らなかった学者」と噂を立てられた長岡半太郎（1865—1950、土星型原子モデルを提唱した世界的な原子核物理学者、弟子に寺田寅彦、仁科芳雄ら、第1回文化勲章受章者、噂は事実無根）

のように、脇目も振らずに勉強に励む「大戦を知らない学生」だったのか。「一高時代はきわめてのんきにのびのびした気持で勉強できた」（再掲、『霧笛』51頁）のだから、学生らしい遊びをして人並みにさまざまな情報に接していたはずである。実際、「一高時代に万朝報を購読していた」（前掲40頁）。理工系の学生ならいざ知らず、なぜ法科の学生が社会情勢にコメントしないのだろうか。

ここで1910年代の世界や日本の動きについて、少し長くなるが高校の日本史教科書・年表風におさらいしておこう。倉吉中学校2年生（16歳）から東京帝大卒業（26歳）までの期間に相当する。思想は「時代の子」である。たとえどんなに独創的な思想であっても、思想家の生きた時代は何らかの痕跡を残すものである。

1910（明治43）年—『白樺』創刊（4月）、大逆事件（5月、明治天皇暗殺を企てたとして社会主義者、アナキストの幸徳秋水らが検挙、翌年に24名が処刑された冤罪事件）、柳田國男『遠野物語』（6月）、韓国併合、朝鮮総督府設置（8月、前年10月、ハルビン駅にて安重根が伊藤博文を暗殺）

1911年—日米通商航海条約調印（2月、関税自主権の完全回復）、『青踏』創刊（9月）、孫文による辛亥革命（10月、翌年1月1日に中華民国建国、清の滅亡）、アムンゼンが南極点に到達（12月）

1912（明治45、大正元）年—美濃部達吉『憲法講話』刊行、大正デモクラシーの学問的基盤となった天皇機関説の提唱（3月、美濃部と上杉慎吉の論争）、タイタニック号が北大西洋で沈没（4月）、明治天皇崩御、大正天皇踐祚、元号が明治から大正へ（7月30日、翌々月に乃木希典殉死）、鈴木文治らが日本の労働運動の源流である相互扶助団体・友愛会を結成（8月、現在の日本労働組合総連合会（連合））、第2次西園寺公望内閣が2個師団増設案を閣議で否決（11月）、西園寺内閣総辞職、第1回憲政擁護大会（12月、第1次護憲運動の始まり）

1913年—第3次桂太郎内閣総辞職（3月、大正政変、桂園時代の終焉）、最後の将軍、徳川慶喜死去（11月、享年77）

1914年—夏目漱石『こゝろ』が朝日新聞で連載開始（4月）、サラエボ事件（7月23日、5日後に第1次世界大戦勃発）、日英同盟に基づき大日本帝国がドイツに宣戦布告、パナマ運河開通（8月）、東京駅開業（12月）

1915年—第2次大隈重信内閣が袁世凱政権に対華21カ条要求（1月、山東半島、遼東半島の権益の追認、漢冶萍公司（中華民国最大の製鉄会社）の日華合弁化、中国沿岸部の港湾・島嶼の外国への不割譲、中華民国政府顧問として日本人を雇用、袁世凱政権は5月に受諾）

1916年—吉野作造が『中央公論』に評論「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」発表（1月、民本主義の提唱、大

正デモクラシーを代表する論文)、ヴェルダンの戦い(2月~12月、ドイツとフランスが戦った第1次大戦の主要な戦いの一つ、両軍合わせて70万人以上の死傷者)、サイクス・ピコ協定(5月、イギリス・フランス・ロシアがオスマン帝国領の分割を密約、1915年のフサイン=マクマホン協定(イギリスによるアラブ独立支持)、1917年のバルフォア宣言(イギリスによるパレスチナにおけるユダヤ人居住地建設の支持)とあわせてイギリスの三枚舌外交として有名)、河上肇『貧乏物語』が大阪朝日新聞で連載開始(9月)

1917年—ロシア2月革命(3月、ロシア歴2月、ブルジョア(民主)革命、ロマノフ朝滅亡、臨時政府の成立、7月にケレンスキーが首相就任)、理化学研究所創設(3月)、アメリカが第1次大戦に参戦(4月)、「アラビアのロレンス」(英国大尉)率いるアラブ反乱軍がオスマン帝国アカバを奪取(7月)、イギリスによるバルフォア宣言(11月、ユダヤ人国家建設を約束)、ロシア10月革命(11月、ボルシェビキの武装蜂起、社会主義革命、ソビエト政権樹立)、フィンランド独立(12月)

1918年—ウイルソン・アメリカ大統領による14カ条の平和原則(1月、アメリカ議会の一般教書演説で提示した講和原則)、ソビエトとドイツの間でブレスト=リトフスク条約を締結(3月、ボルシェビキ政府とドイツ帝国、オーストリア=ハンガリー帝国、ブルガリア王国、オスマン帝国との講和条約、ソビエトが第1次大戦から離脱)、富山県で米騒動(7月、越中女房一揆、北は仙台から南は熊本まで全国各地に広がる、全国中等学校優勝野球大会中止)、シベリア出兵(8月~1922年6月、ソビエトへの干渉戦争)、原敬内閣成立(9月、平民宰相による憲政史上初の本格的な政党内閣)、ドイツ革命(11月、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世が退位)、ドイツと連合国が休戦協定に調印(11月11日、第1次世界大戦が終結)、大学令公布(12月、原内閣の高等教育政策、官立帝国大学に限られていた大学を公立、私立に拡張)

1919年—ドイツでスパルタクス団が蜂起(1月、古代ローマで奴隷を率いて反乱した剣闘士スパルタクスに名を借りた急進的マルクス主義者たちによる武装蜂起、著名な経済学者ローザ・ルクセンブルグと盟友カール・リープクネヒトら数百人が逮捕、虐殺される)、パリ講和会議開催(1月)、大原社会問題研究所設立(2月)、三・一独立運動(3月、朝鮮の大日本帝国からの独立運動)、コミンテルン創立(3月、第3インターナショナル、共産主義インターナショナル、世界革命の実現を目指す組織)、インドでガンディーによる第1次サティヤーグラハ(非暴力、不服従)運動開始、関東軍設置、堺利彦・山川均らによる『社会主義研究』創刊(4月)、中華民国で五・四運動(5月、対華21カ条要求に端を発した抗日・反帝国主義運動)、ドイツと連合国の間でヴェルサイユ条約締結(6月)、アメリカが金本位制に復帰(7月)、猶存社結成(8月、大川周明らが結成した天皇制の下での国家改造を謳った国家社会主義系右翼団体)、ワイマール

憲法成立（8月、ワイマール共和政）、アメリカ禁酒法（10月）、新婦人協会結成（11月、平塚らいてう、市川房枝らによる日本初の婦人団体）

1920年—国際連盟設立（1月）、国民社会主義ドイツ労働者党（ナチス）の設立（2月）、カッパー揆（3月、ドイツ保守派がワイマール共和国政府に対して起こしたクーデター未遂事件）、東京株式市場の株価暴落、戦後恐慌が始まる（3月）、尼港虐殺事件（3月～5月、シベリア出兵により日本軍が駐留していたアムール川河口ニコラエフスクで赤軍パルチザンが日本人731人を含む6000人超の住民を虐殺）、明治大学・法政大学・中央大学・日本大学・國學院大學・同志社大学の設立認可、東京高等商業学校が東京商科大学（現一橋大学）へ昇格（4月）、上野公園で日本初のメーデー開催（5月）、最初の国勢調査実施（10月）、京都赤旗事件（11月、友愛会京都支部長を務めた高山義三が志願兵から除隊したとき、出迎えの50人余りの支援者が「祝出獄」などと大書した赤旗数本を掲げたために警官隊と衝突、逮捕され、治安警察法（1900年制定）によって鍋島貞親、荒畑寒村らに2ヶ月～6ヶ月の禁固刑が科せられた）、大杉栄・堺利彦らによる日本社会主義同盟結成（12月、左派は1922年に日本共産党（第一次共産党、非合法）を結成、合法性を維持したい非共産系は1925年に右派・社会民衆党と中間派・労働農民党に分かれる）

こうして1910年代を振り返ってみると、2020年代半ばの現在では想像もつかないくらい時代は急速に動いている。「明るい未来」を思い浮かべることのできない閉塞感が漂っている。思想的には右（国家改造を目指す国家社会主義）、中（大正デモクラシー下の民本主義）、左（ロシア革命、社会不安をきっかけとする社会主義、共産主義）が出揃いつつある。風雲急を告げる目まぐるしい情勢の変化の真っ只中にいる福本は何を思って学生生活を送っていたのだろうか。

第1次大戦によって日本に好景気が到来した。「大戦景気」である。イギリスやロシアは軍需品などの供給を「五大国」（アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、日本）の一つである日本に求めた。アメリカ・アジア市場ではヨーロッパ製品の供給が途絶えたため、その穴を日本製が埋めることになった。輸出入は4倍になった。造船業、海運業、鉄鋼業、石油化学工業などが急速に伸び、農業国から工業国（特に重化学工業の発展）へと脱皮する。大戦前は債務国であった日本は大戦後には債権国になったのである。株式市場は活況を呈し、急に羽振りがよくなった人たちは「大戦成金」と揶揄された。

四大財閥（三井、三菱、住友、安田）、五大銀行（三井、三菱、住友、安田、第一）を中心とする独占資本主義が形成されていく。産業資本と金融資本が融合する独占金融資本が支配的な経済主体になる過程は、レーニン（1870-1924）が『資本主義の最高段階としての帝国主義』（1917年）で指摘した資本主義の一段階である。レー

ニンの分析・言説に従わなくても、現実の世界は国家独占資本主義が帝国主義戦争を惹き起こしているかのようであった。

資本主義下の経済成長によって不労所得者と労働者の経済格差が急速に進行することは、ピケティ（1971-）が世界的なベストセラー『21世紀の資本』（2013年）で理論的にも歴史的に論じたとおりである。大戦景気による物価高は人々の生活を苦しめた。大戦前後で物価は2倍以上になった。いつの時代でもそうだが賃金は物価上昇に追いつかない。1917年に寺内正毅内閣がシベリア出兵を決定すると、戦争特需の価格高騰を見越した卸売業者や投機筋の売り惜しみによって1918年前半で米価は3倍以上に急騰する。7月に富山県で起こった米騒動は全国各地に飛び火し、政府は米騒動の参加者を取り締まる（検挙者は2万5千人、起訴は8千人弱）。東京府は「外鮮米」（朝鮮半島産の外米）を指定業者に廉価で販売させた。9月、寺内内閣は総辞職し原内閣が発足する。年末には米価は米騒動前に戻った。

好況の後に不況が到来するのは必然である。大戦が終わるとヨーロッパからの需要が増加して、経済活動は一時的に大戦中より活発になった。「大正バブル」である。1920年3月、過剰生産が原因である「戦後恐慌」が始まる。株価が半分から3分の1に暴落する。バブル経済の強烈な反動である。

1920年代は慢性不況が支配していく。社会不安は増大し続ける。その一方で四大財閥は着実に収益を上げ、独占資本を確たるものとしていくのである。

一高英法科から帝大法学部政治学科へ進んだ福本は友人や先生の思い出を語っている。正確に言えば、その他については語っていない。

一高3年間、国文学を教わったのは菊池壽人（1864-1942、後に一高校長）であった。菊池のエピソードは僅か一つだけである。3年生のときであったか出席点呼が終わると授業に入らずにこう切り出す。菊池は国文科、漱石（1867-1916）は英文科の出身である。

「漱石が死にましてね。今日はわれわれ葬式に行かなければならぬので、これでお休みにします。漱石はかねて、「四十になったら、自分は仕事をやるぞ」とよく語っていましたがね。ほんとに四十からやり出して、この十年間に大きい仕事をやりました」といつもニコニコと微笑してられる菊池先生が、しばしば感慨無量のていで語られた光景が、それから二十余年の今日もなお、彷彿として私の眼前にうかぶ。（『霧笛』50頁）

漱石は38歳のとき『吾輩は猫である』（1905年）で小説家としてデビューする。福本は14年もの拘禁生活を終えた48歳（漱石は49歳で死去）のとき、それまで誰も構想し得なかった「日本ルネッサンス史論」に着手した。菊池の思い出として漱石を取り上げたのは、晩年の漱石の挑戦に自らの姿を重ね合わせていたからではなかったか。未踏の地を開拓する同志として、である。いささか穿ち過ぎだろうか。

国文学の試験成績は100点に近かった。福本は国文科には進まなかったが、友人の麻生磯次（1886-1979）は大学では国文学を専攻し一高教授・校長になった。東京大学教養学部長、文学部長を務め、日本学士院会員、文化功労者（死後、勲一等瑞宝章）となった日本近世文学の碩学である。奇しくも福本と麻生は江戸期の芸術文化を研究対象にしたことになる。

この麻生君にあうと、彼は口ぐせのように、君とぼくとの二人は、一高同級生中のかわりものだから、といて、おだやかにわらう。そして何のこだわりもなくおたがいうちとけて、かたりあうのをつねとする間柄であるが、麻生君がわれわれ二人をとくに級中のかわりものだ、とみとめているのは、二つの理由にもとづいている。その第一は、彼は英法科から大学はわざわざ文科にかわって、文学博士になったただ一人のかわりものであり、わたしは、同級の多くのものが、官吏や実業家になっているのに、共産主義者になったただ一人のかわりものであるのみならず、大学は政治学科をでて、しかも文化史の研究をやっている、すなわち文科的な仕事をやっている点でもかわっていること。その第二は、学問的研究にまじめで熱心な点でも、同級生中では、なんといっても、君とぼくだというのが、麻生君の見解である。

（前掲52頁）

ロシア革命が進行中の1917年、福本は法学部政治学科に入学する。当時の法学部内の学問闘争を克明に回想している。

教授たちの間では厳格法学と自由法学の対立・抗争が渦巻いていた。厳格法学の立場は立法者の意思を尊重して字義通り解釈するのに対して、自由法学では条理に照らして社会の実情と変遷に即応するように斟酌を加えて解釈する。前者はドイツ法学的な「封建的、神がかり的な態度」（前掲55頁）、後者はイギリス法学的なブルジョア自由主義の立場である。上杉慎吉（憲法、1878-1929、天皇機関説反対の急先鋒）が厳格法学の代表者で、美濃部達吉（憲法、行政法、1873-1948、長男が元東京都知事の亮吉）、吉野作造（政治

史、1978-1933）、牧野英一（刑法、1978-1970）が自由法学派であった。

帝大の憲法講座では帝王神権説に基づく上杉憲法学が教えられており、美濃部憲法学の天皇機関説は帝大から締め出された形になっていた。美濃部は行政法を教えるにとどまり、渋沢栄一らが興した神田一ツ橋の高商（現一橋大学）の憲法講座で資本家の卵たちにブルジョア自由主義を説いていた。

福本は帝大と陸軍大学校（参謀将校養成機関、陸軍士官学校を卒業して少尉に任官した者のうち約1割が入校）を掛け持ちしていた上杉のことを相当嫌っていたようである。

上杉憲法学は、絶対主義と藩閥と軍閥とを中世的な、ローマ法皇的論理で支持し、鼓舞鞭撻すると共に、官僚と軍閥の雛鳥を育成する役目を、すこぶる派手にはたしたのであった。陸大について、東大から、ぞくぞく多くの戦犯を、第二次大戦におくり出したのは、上杉憲法学が、あずかって力あったことを、だれもが否定できないであろう。 （前掲56頁）

福本は新渡戸稲造（1862-1933）の経済史の試験で98点を取ったこと、吉野作造の政治史の論文で「優」をもらったことを誇りに思っている。それなのに、上杉憲法学の試験は50点で、学生生活の中で最初で最後の落第点を付けられた。福本は長々と批判、悪口半々の言い訳を書き連ねる。思想的傾向が垣間見るとても面白い箇所なので省略せずに引用してみよう。これまで引用してきた文章より読点をさらに頻繁に用いる文体、異様なまでに長い一文は特徴的である。

いくらなんでも、五〇点とはひどすぎはしないかと、当時は正直なところ、少々、おどろきもし、癪にさわったものであったが、元来、幼少のころから、軍人は馬鹿ばかしくみえて、大将などを理想としたことは、ひとときもなく、長じては、藩閥政治家、軍人政治家が、ひじょうに、きらいで、すべて、保守的、封建的、官僚的、非合理的なものに、極度の反感をいだかずにはいられなかった私が、一したがってまた、上杉反動憲法学のふんいきに、窒息を感じないではいられなかった私が一みごと落第点をつけられたのは、考えてみれば、当然至極のことであり、その意味で、さすがに、上杉博士は、先見の明があったと、いわなければ、ならぬかもしれぬと、そうもおもわれるのだが、当時は、ドイツ軍の形勢が次第にわるいので、「時事日に非なり」と慨嘆の言葉をもらしながら、教場でいつもためい

きについてばかりいる博士であったので、われわれは、いささかあわれに感ずるばかりで、けっして、毛頭、敬意をはらう気にはなれなかったのであった。学問上から、日本を毒したる罪のもっとも重きものは誰よりも、おそらくこの人であろう。

(前掲57頁)

前田寛治は第三高等学校(現京都大学)の工科を受験して不合格になった。浪人して東京美術学校(美校、現東京藝術大学)を受ける旨を伝えるために一高の寄宿寮を訪れたときから交友関係が再開する。

美校時代、前田は2、3人の同級生と共同生活をしていた。福本はよく訪ねて行ってはルノアール、ゴッホ、セザンヌらの画集を見たり、いろいろな展覧会に連れて行ってもらったりした。前田に薦められてゴッホの複製やルノアールや岸田劉生の画集を買ったこともある。最も印象深かったのが草土社(岸田劉生、中川一政らによって1915年に創立されたアンチ印象派の洋画団体)の展覧会であり、そこで見かけたバーナード・リーチ(1887-1979、イギリスの陶芸家、画家、デザイナー、白樺派や民芸運動に協力)の姿は強く記憶に残っている。福本は前田から知識を得た印象派と獄中で出会った北斎芸術の関係を『北斎と印象派の人々』(1947年)などで論じることになる。

福本が法学部で学んでいた頃、特別の知遇を得てしばしば訪問していたのは倉吉町出身の大先輩である桑田熊蔵(1868-1932)である。桑田は帝大出身の法学博士で、当時、中央大学教授を務めていた。大地主の長男で多額納税者として貴族院議員に2期(1904-1918)在任し、友愛会、日本赤十字社などの役員を歴任して工場法(1916年施行、1947年の労働基準法施行によって廃止)の制定に尽力した労働問題を専攻する学者である。帝大では工学部の講師として工業政策を講義していた。ヨーロッパの土地改革問題などに深い関心をもち労使協調と社会政策を推し進めるリベラルな立場にいた。

福本は、桑田は同郷の後輩が自分の学問の後継者になってほしいと考えていたのではないかと推察する。自由法学や大正デモクラシーの民本主義には大いに共鳴しながらも、微温的な労使協調政策に飽き足らないで大学卒業後にマルクス主義へと突き進んだ福本にとって、桑田の後継者になることなど到底できなかった。

福本は序章で言及した東大新人会(1919-1929、吉野作造を顧問として創立)には入っていない。1920年代後半に日本共産党の実質的な下部組織となる新人会は、当初は人道主義的理想主義の啓蒙団体であった。福本は学生時代にマルクスを本格的に読んでい

た形跡はない。「『資本論』を原書で、少しばかりかじったのは……ドイツ留学中のことであった。」（前掲53-54頁）

2年半の留学から帰ってからは、福本と桑田の思想的立場は決定的に乖離していた。

しかし、先生はいつまでも相変わらず学生時代のように、私には好意的であるのが感じられた。そしてそれがかえって心ぐるしくおもわれてならなかった。（『裸像』46頁）

桑田は福本に博士号を取得するよう強く勧める。「君は今少し勉強したら、博士号は請け合いだ。……自分がちかかって助力してあげるつもりだ。」（前掲47頁）と言って、4、5のテーマをアドバイスする。博士論文は大きな問題を扱うよりも細かな具体的な問題を掘り下げの方がよい、とも。

ご好意まことに有難いが、私からすれば、実に些末な興味のない問題ばかりで、そんなことを懸命に研究してみたって、それがいったい、世の中をよくするのに、何の役に立つかしらと私には思われた。（中略）

ご好意にそむくのは心苦しい限りだが、ご意見にはしたがえない。私は私の方法で進むよりほかはない。博士号などどうでもいいと決心した。（中略）

右の決意には、私のまだ学生時代、夏目漱石が博士号を辞退した事件があって、それに深い感銘をおぼえたのが、あずかって大いに力あったかもしれない。

いやしくも左翼陣営に身をおきながら、博士号をほしがったり、あるいは、博士号をえて、えらそうにおもい得意顔の面々に接するおり、私は内心それらの人々の不見識をむしろ、あわれみずにはいられないのである。

先生は、私の在獄中1932年12月、65歳で長逝された。私をはじめ、倉吉市内にある先生のお墓にもうでたのは、1955年夏のことであった。（前掲47-48頁）

時間が先に進み過ぎたようだ。1920年、福本は大学を卒業して、17番目の官立旧制高等学校として新設された松江高等学校（翌年4月に第1回入学式、現島根大学）に教授として赴任する。山陰地方に官立高等教育機関を誘致するために鳥取県と島根県が競い合い、1918年に鳥取県が3番目の官立高等農林学校（高農、現鳥取大学）の誘致に成功、その後、島根県が高等学校の誘致を勝ち取って雪辱を果たしたのである。